

たねまきアクア

ア
ク
ア
@KCUAとその周辺に広がる
創造活動の現在形

03

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

ZINE

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA とは

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAは、2010年春、中京区堀川御池に京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴い、その敷地内南側に建てられたギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）内に設立された京都市立芸術大学のサテライトギャラリーです。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所（サイト）を示す「@」を付けたもので、音読するとラテン語の「アクア=水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという大学の理念を表現しています。

当ギャラリー学芸員の企画による特別展のほか、京都市立芸術大学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展など、年間約20本の展覧会を開催しています。そのほか、国内外で活躍するアーティストを講師に迎えた若手アーティスト対象のワークショップや京都市立芸術大学移転整備プロジェクト「still moving」の実施、また2016年より拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」に参画するなど、展覧会だけにとどまらず、多岐にわたる活動を実施しています。

COVER PHOTOS:

身体0ベース運用法

「パーソナルトレーニング」

2017年9月2日（土） - 10月15日（日）に京都市立芸術大学ギャラリー @KCUAにて実施の身体0ベース運用法「0 GYM」（東アジア文化都市2017 京都 アジア回廊「現代美術展」同時開催展）に向けて、若手作家の個別トレーニングを開始（pp. 4 - 15 参照）。

この時期、@KCUA に一体何が起るのか？

<http://www.shintai-0-base.com>

たねまきアクア

03

Contents

- 4-15 **WORKSHOP @KCUA** — 「身体0 ベース運用法」
- 16-19 **REPORT @KCUA** — 拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」
- 20-21 **REPORT @KCUA** — 「マーティン・クリード in 京都」
- 22-23 **SCHEDULE @KCUA 2017.4-2018.3**
- 24-25 **VOICE @KCUA_vol. 3** — 榊原充大「あらゆる役割にプロがいるわけじゃない」
- 26-31 **STUDIO VISIT @KCUA_vol. 3** — 坂東幸輔「徳島県神山町」

たねまきアクア

たねまきアクアは、@KCUA とその周辺に広がる創造活動の現在形、
クリエーションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です。
(不定期発行、無料)

WORKSHOP @KCUA

身体Oベース運用法



DNA
101

ん
た
い



目

てい

染色作家・安藤隆一郎の提言する

身体0ベース運用法とは

〈身体0^{ゼロ}ベース運用法〉とは、歩く・座るなど、日常生活の中で一般的に「安定」して行われる身体運動に「もの」を関わらせることによって「不安定」を作り出し、「不安定」を「安定」へと戻そうとする中に、人間が元来持つ運動機能を見出す試みです。これによって発見された〈身体〉は、武道・スポーツ・身体表現だけでなく、人間の活動全てにおいて応用できるものです。



〈身体〉から

作品の可能性を拡げてみない？

どんな作品を作るにしても、何らかのかたちで〈身体〉が必ず関わってくる。線を描くにしても、彫るにしても……。染色の場合は下絵を描き、布を染める。全て手作業なので、〈身体〉をうまく使えないと描きたい線が描けないし、刷毛で思うように染めることもできない。身体の動きと作品は切り離すことができない。そこから「身体の方から作品の可能性を拡げてみたらどうか？」と考えてみた。

生活の中にある「もの」を改めて観察すると、その多くは人が楽に、簡単に扱えるようにデザインされている。大根の皮を剥くのだって指先と包丁を上手に使わなくても、ピーラーを使えばサッと引くだけで簡単に剥ける。同じように、街の地面はスマホを見ながらでも歩けるぐらい平らだ。そんな環境では人が元来持つ高度な運動機能を使う必要はほとんどない。さらには色々なことがボタンひとつでできるようになり、困ったことに、多くの動きを使わなくなってきた。そんな中に身を置いているのだから、まずは「歩く」「座る」といった日常的で単純な身体運動を意識的に行わないといけない。そこで、〈身体0ベース運用法〉という方法を考えてみた。



安藤隆一郎

0 ベースを通して〈身体〉への理解が深まってくると、人が作業をしているのを見る度に「ものづくり」における〈身体〉への意識が少しずつ薄れている気がしてならない。美術において「理論」「技法」「素材」について考えることは多いかもしれないが、それを作る〈身体〉の使い方について考える機会は少ないように思える。でも、美術においてもそろそろ〈身体〉についてもっと考え始めても良いのではないかと思う。そして、〈0 ベース・パーソナルトレーニング〉がそのきっかけとなることを期待している。

このトレーニングのプロジェクトでは美術作家とともに〈身体〉から作品の新しい可能性を探っていく。〈身体〉を使う作家でも、あまり使わない作家でも、まずはその作家独自の制作方法を観察することから始め、その作家がどう〈身体〉と関わっているかを分析していく。そして、各作家に合わせて考案する「もの（物・場・リズム）」を使った0 ベースの基本トレーニングを体験してもらい、〈身体〉の使い方を理解する。そこから作品の制作手法と〈身体〉を結びつけ、取り組む作品に必要なト

レーニング方法を考え、デッサンやスケッチをするのと同じように毎日行いながら作品を作っていく。この一連の過程を通してそれぞれの作家と一緒に新しい作品を生み出していくということを行っていきたいと考えている。

まだ始まったばかりだが、〈0 ベース・パーソナルトレーニング〉を続けていくことで、「ものづくり」の視点から〈身体〉を考えていくことをひとつの分野として確立したいと思う。また、美術の領域においても作品制作に関わる〈身体〉について多くの人と考え、話し合える機会が増えていくことを期待している。

安藤隆一郎 Ryuichiro Ando

1984 年生まれ、京都出身。染色作家。

2016 年 4 月に〈身体 0 ベース運用法〉を始める。
同年 9 月から 2017 年 2 月までゴータ企画 2016
ワークショップシリーズ「Freshly Mixed vol. 2」
にてパフォーマンスのワークショップを行う。
2017 年 9 月 2 日から 10 月 15 日まで、@KCUA
にて身体 0 ベース運用法「0 GYM」を開催予定。

WORKSHOP @KCUA

第1回 身体0ベース パーソナルトレーニング

水谷昌人の場合

1人目のパーソナルトレーニング受講作家に選ばれたのは、美術作家の水谷昌人さん。ある日、とある舞台設営の現場でハシゴをぎこちなく上る水谷さんを見かけてから、安藤さんはずっと彼に目をつけていたようです。

水谷さんのお悩みは「たくさんあるけど、とにかくまず姿勢を良くしたい!」とのこと。「水谷くんの身体の問題はそれだけじゃないはず。作品を作っている様子を見てみましょう」と安藤さん。

そこで安藤さんと@KCUA スタッフは、水谷さんのアトリエへと向かったのです。



0 ベース・パーソナルトレーニング

受講作家 No. 1

水谷昌人 Masato Mizutani

1990年大阪府生まれ。2016年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了。「アートアワードトーキョー丸の内 2016」(丸ビル/東京)にて建畠哲賞を受賞するなど、注目を集めつつある若手作家の一人。近年は物故作家の作品をモチーフとした制作を行う。2017年4月8日から5月21日まで@KCUAにて開催中の「京芸 transmit program 2017」出展作家。





はじめに「姿勢を良くしたい!」という水谷さんからのリクエストに答えて、歩き方のトレーニングから。アトリエにあったスピーカーを水谷さんの頭に載せる安藤さん。「頭の上にこれを載せた状態で歩きながら、バランスの取れる姿勢を探してみよう」という指示のもと、不安そうに歩き始める水谷さん。そのまま数分歩いてみると、いつもの歩き方との違いが見えてきたようです。「もう一つ。水谷くん、歩くときあまり手を振ってなくない?」ということで、スピーカーを下ろして、先ほど見つけたバランスを保ちながら、さらに手を振って歩くトレーニング。しばらく歩いてみて、どうやら少しコツがつかめた様子。

基本の歩き方のトレーニングの次には、アトリエに戻って水谷さんが作品を制作している様子を見せてもらうことに。

はじめに、モチーフとなる物故作家の作品から抽出した色の層をアクリル絵具でキャンバスに重ねていきます。そして、その層が完成したら今度は中央をキャンバスの面に向かって四角く彫刻刀で掘ってくり抜きます。

……作品制作の工程はまだ続くのですが、ここで、安藤さんのチェックが!

水谷くん、その切り方、彫り方、しんどくない?



切る・彫る 教則

水谷昌人の作業工程を観察し、気になった二つの作業についてアドバイスした。全身を上手く使うことによって、作業の正確性と持久力を上げていくことができる。そして、作業の繰り返しによって肩や腕を痛めることを予防する。

二方向の重心移動を利用する

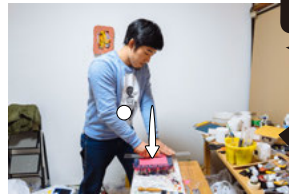
力が必要なような作業ほど自重を利用する。腕を使った動作も全身運動に置き換えることができるようになる。

1



腕の力でカッターを押さえるのではなく、体重を使って押さえる。

2



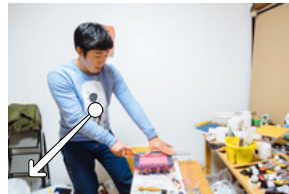
身体の重心はカッターの近くに置き、体重をかけやすいようにする。

3



カッターに向かって真下に体重をかけながら、後方に重心を移動させる。

4



体は二方向を合わせた斜め下後方に動かしていく。

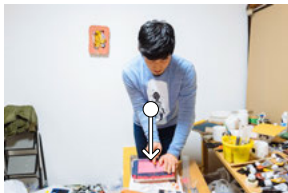
切る

彫る

腕をつっかえ棒にして彫る

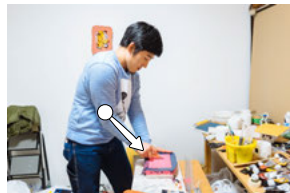
肘の位置を変えるだけで腕の力を使わずに彫れる。自重を利用するから楽に、正確に彫ることができる。

1



右腕の肘を腰に当てて彫刻刀と肘が一直線になるようにする。

2



腰に重心を置き、体重を腕に伝えられるようにする。

3



肘と腰を密着させたまま、前後に重心移動をして彫っていく。

4



力に頼らないので刃を正確に止めやすい。



水谷：今日は頭に物を載せて歩いた後に基本の歩き方を教えてもらったのが大きかったです。あれ、姿勢の正しい方がすごくわかりやすくて。早速ちゃんと歩かないとな。

安藤：物を載せる微妙な位置は色々試してみても、初めはわかりにくいかもしれないけれど、身体でしんどいところがある場合は載せた位置が悪いということやし。

水谷：楽なところを目指していくんですね。

安藤：何をしても力を使えばできるけど、身体のだこかを痛めたりするやろうから、自然な体勢でできるようにしないと。座って作品を彫ったら上半身だけ

に負担がかかってしまうから、身体の負担は大きいかもしれない。立って彫ったら、無理な負荷がかからない。(作品の制作の過程で)切るとか、彫るとか、塗るとか今日見せてもらったけど、他には何かしんどく感じたことはない？

水谷：追い込みの時に指にタコができた。マンガ家みたいに。無駄な力がかかってるんかなあ。

安藤：それはまあしょうがないかもしれないへんなあ。

水谷：机の作業が多い人って、肩とか腰とかを痛めていることが多いと思うんですけど、これも身体の使い方変わるんですか？

安藤：それはあると思う。同じ動きばかりだとバランスは崩れてくるからなあ。僕も右手ばかり使ってたら疲れてくるけど、そういうときは歩くねん。自分の中で楽な正しい姿勢を意識しながらゆっくり歩くねん。そしたら自然とバランスが戻ってくる。

整体みたいな民間療法で「操体法」って

いう、身体を動かしながらその快適感覚を聞き分けて身体の歪みを治していく方法があんねん。これと同じように意識してやったら結構良くて。

どんな動きにしろ、やってるのは同じ身体やから、どうやったらバランスが取れた自然な状態かを認識してやるのが大事。何も考えずに使うんじゃなくて、「こうやって絵の具を混ぜな色が混ざらんやん」というのと同じように観察するねん。そしたら、わかってくる。単に押すのも、押す角度とかを考えて、いろいろ試して、力加減のいいところを探す。

大体みんな物を作っている人は何かしらを観察している。それと同じように、例



えば絵を描く人なら、どんな線を引きたいのか、そのためにはどうやって動けばいいかとかを考えるとわかってくるはず。昔の水墨画とか見たら、あんな大きな一筆書きのどうやって引いてるのかなって思う。墨なんか、止まったら溜まるやん。でもそうならないからどうやって描いてんのかな、って考えてんねん。

今の時代は、動きがどんどん単純化してる。昔の人は何をやるにしても動きがもっと複雑やったと思う。江戸時代の人は米俵を2個持つことができたらしいやけど、その頃、武道とかしてる人は江戸は便利すぎであかんから山ごもりをしに行ったらしい。

水谷：米俵2個持てても？！

安藤：そうそう。だからさ、未来に、「昭和とか平成とかの人らって、水をバケツに入れて持てたらしいで！」とかなくなるかもしれへん。そうになったら、また描くもんも変わってくるかもしれへんやん。

水谷：米俵2つ……。両手に20キロの米をスーパーで買うだけでやばいのに。



安藤：その頃は行商の人は自分で商品を担いで持っていったからなあ。女の人でも。

水谷：マジか！

安藤：水谷くんが毎日、20キロからどんどん増やしていったら、そのうちひょいって持てるようになるかもな。

水谷：実は僕、去年、京芸に在学中のときから1年くらいジムに行ってたんですけど、筋肉はつくんですよ。修了制作とか忙しくなってやめたんですけど、ごつなってきた時に、これキャラ的にいいのかな、って思って。

安藤：キャラは知らんけど、ジムでベンチプレスだけとか僕は反対や。特にただ

その場所を鍛えてるだけのとか。ランニングとかめっちゃ頑張ってる人を見ても、靴底が変な削れ方してたりすると、この人走るだけだんどんん身体痛めていくんやろなと思う。全身がちゃんと連動して動けば、筋肉もそんなにいらんし、楽に動けるはずやねん。

水谷：一時期追い込みかけるために、毎日走ってたんです。そしたら足を痛めてしまって。ランニング初心者にありがちな痛め方やって言われました。そこからウォーミングアップをちゃんとやってから走るっていうことにしたら、下準備、筋トレ、走る、というのに時間かかりすぎて、やめたんですよ。体力はつけたいけど。ウォーキングも1年くらい続けてみたことあるんですけど、何も変わらんかった。

安藤：ウォーキングは今日やったことを思い出しながら、今こそやるべきや。筋トレなんかやらんでもいいねん。

水谷：今度走り方も教えてください。

安藤：まずは歩き方や。

あくらがかけない、というのも水谷さんの悩みの一つ。



水谷：でももう少ししたら筋トレもしたい。

安藤：筋トレ禁止！

水谷：何で？

安藤：変な筋肉ついたらバランス崩れるから。

水谷：ちゃんと歩けるようになったら筋トレしてもいい？

安藤：歩けるようになったらな。筋トレは専門ではないけど、筋トレも、自分の身体に何が起きてるか気にしなかったら意味ないと思う。観察できるようになってからでないと。

水谷：歩くことに集中します。

安藤：何で筋トレしたいの？

水谷：腕が細すぎる。

安藤：モテたいってこと？

水谷：いや……、でもそれ7割くらいあるかもな（笑）。院生時代に手伝いしてた先輩がいて、最近久々に手伝いに行ったんですけど、パネル運んでる時に気づいたんです。学校にも行ってないし、机の作業ばかりしてたから、筋力落ちて、人間としてやばいなって。

安藤：でも筋肉だけあって動きはぎこちないとか、あかんで。

水谷：見せるだけの筋肉って嫌われるらしいですよね……。もともと男にしては力がないんです。油絵描くの力なくてもよかったし。修了展のときに灯油持たなあかんくて、まだ女の子よりは持てる方やったけど。

安藤：灯油のタンクを持つ時も、重心から離れているかどうかで持ちやすさは変わってくる。自分の重心に近づけて持つねん。肩に乗せるとか。

水谷：力がありそうな人はそうやって持ってるイメージがあるけど、実は力が

あるからじゃなくて効率のいいやり方なんや。

安藤：筋肉なくても持てる。

水谷：生きる力がつきそうです。歩くときには頭に何載せたらいいかなあ。

安藤：砂袋、いや、米載せたら？

水谷：米か。

安藤：重い方がわかりやすいけど。今日載せたスピーカーとかは1キロくらいじゃない？

水谷：え？マジか！

安藤：まず5キロから始めよう。その方がわかりやすいと思うわ。それで、もう不自然な歩き方をしないようになったら、次のステップに進もう。





水谷：一人でやって不安になったら連絡してもいいですか？

安藤：いつでも連絡とって来ていいから（笑）。色々やってみたらいいんじゃない？

水谷：米でできるようになるかな。

安藤：歩いてるときの頭と腰の位置を目印に、バランスを取れる場所を探す。それをやってみたらいい。

水谷：自分で課題を増やそうとしてる……。とりあえず歩く！

安藤：歩きながらバランスのいいところを探す。それがわかったら、座るときも、階段を上がるときも、そこから合わせていけるようになる。

水谷：米買いたいな。電車でもいけるかな。電車でもバランス取れるか、やってみたくなった。変な人ですかね？

安藤：そんなことないんちゃう？僕いつも、でっかい棒とか持って走ってるから。

水谷：何で？

安藤：練習のために。

水谷：何の？

安藤：いや、だから、0 ベース。

水谷：研究者ですね。

安藤：高校生にはバカにされる（笑）。おじさんは自分のことに集中してるから、気にならないけど。でっかい棒の他には、ビニール袋に水を入れたりして頭に載せてる。



水谷：水いいな！

安藤：水は動くから難しいねん。

水谷：水やってみたい。

安藤：まだ早い（笑）。

水谷：じゃあ米でできるようになったら水！

安藤：そのときは分厚いビニール袋あげるわ。破れてまうから厚いのじゃないとあかんねん。水はすぐ動くな。バケツに入れているのと同じ量でも、ビニール袋だとぐにゃぐにゃ動くから。同じ素材でも形態を変えて運び方とそのバランスを探る。そこまでたどり着けたらな。

水谷：アトリエから自宅まで往復 40 分くらい。毎日やってたら「探○ナイトスクープ」の取材くるかな。不思議とどんどんやりたくなってきました！

（2017 年 1 月 11 日）

—

注：米俵は 1 俵 60 キロ

身体 0 ベース運用法では、「0 GYM」（2017 年 9 月 2 日 - 10 月 15 日）に向けて、パーソナルトレーニング受講作家と認定 0 トレーナーを募集集中！詳しくは @KCUA のウェブサイトをご覧ください。



REPORT @KCUA

拡張された場における アートマネジメント人材育成事業

「状況のアーキテクチャー」

京都市立芸術大学では、2016年度より文化庁補助事業として、アトリテラシーの普及や展覧会のキュレーション、まちおこしとしてのアートイベントの企画などといった従来型のアートマネジメントの次の段階に向けた人材育成事業「状況のアーキテクチャー」を実施しています。

本事業では、芸術や学問の専門性を社会の多様な現場で活用すると同時に、学問や芸術の新たなありかたにも繋げる活動としてアートマネジメントを位置づけています。人間の活動の根本にある《物質》《生命》《社会》の三つのテーマを軸に、2016年度は少人数で身体や対話を重視する「セミナー」、構想・計画・設計から実現にいたるまでのプロセスを専門家と共有することを重視した「プロジェクト」、広く一般に向けた活動紹介としての「公開講座」や「成果発表」といった複数の形態で事業を展開してきました。

このうち、「たねまきアクア」では、プロジェクト「オープンキッチン」の成果発表として@KCUAで2017年3月に実施された「Open Kitchen」展をご紹介します。

「オープンキッチン」目標

(たんぼぼの家と講師による共同執筆文章より抜粋)

1. 言葉による相互理解に捉われず、**非言語のコミュニケーション**を意識する。
2. コミュニケーションに発生する「**ずれ**」や「**摩擦**」を巻き込んだ対話を試みる。
3. コミュニケーションそのものを**体感し、楽しむ**。

Photos by Takuya Matsumi

「オープンキッチン」とは、たんぼぼの家と京都市立芸術大学、両者の距離を探りあてるためのプロジェクトです。たんぼぼの家のアーティストと京都市立芸術大学の学生が五つのペアを組み、作品を取り交わします。作品は箱に入れて届けられ、つくり足すのも、つくり変えるのも、別の作品を返すのも、自由！やりとりを2016年夏から半年間続けた後の成果展「Open Kitchen」では、結果としての作品だけを提示するのではなく、それに至るまでの映像や写真、手記をあわせて展示しました。時にあやうい足取りを、それでも楽しみながら進んでゆく、奇妙な文通の記録となりました。





…水色も赤も光ってることが大事だから、光の明るさがあって、輪つなぎがどんどん手裏剣のように変わって、光の明るさがどんどん変わってきて黄色もたくさんあります。黄色から緑に変わって、緑からピンクに変わって、ピンクから白に変わることが一度に大事

です。赤や緑も大事だから、手裏剣のように変わってきて、星のようになります。星形のように変わった光が空に、舞い上がって、花火のように舞い上がって、光のように、峠を越えて光のように、空の高いところで花火のように舞い上がって宇宙を旅することが大事



です。宇宙の花火の旅立ちもあって新しい光が、一齐に光って、明るさがどんどん爽やかな光がどんどん目立つようになりました。

——伊藤樹里

(本展出品作家 / 1月21日の文章作品より抜粋)

拡張された場における

アートマネジメント人材育成事業

「状況のアーキテクチャー」

事業統括：高橋 悟（美術家／京都市立芸術大学美術学部教授）

プログラムコーディネーター：岸本光大、熊野陽平、中田有美

プロジェクトマネジメント：藤田瑞穂

（京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA 学芸員）

<http://www.kcuu.ac.jp/art-m>

状況のアーキテクチャー

「Tracing Life: 生存の技法—

ケア×アート」プロジェクト

「オープンキッチン」成果展

「Open Kitchen」

会期：2017年3月23日（木）－30日（木）

出展作家：鮎川奈央子、伊藤樹里、加納明香、河原雪花、小松和子、土居あかね、中村真由美、萩原宏一郎、武藤 桃、山口真琴、山野将志



たんぽぽの家

「アート」と「ケア」の視点から、奈良市を拠点に画期的な事業を実施している市民団体。従来のアートの枠組みを超えた形で、障害のある人たちの創造活動を支援している。また、そこから生まれる関係性から、新たな価値観を包摂した文化づくり・社会づくりを目指している。2016年には、社会に新しい仕事をつくりだすことを目指して Good Job! センター 香芝を設立。障害のある人とともに、アート・デザイン・ビジネスの分野や、個人、企業、地域の垣根を超えた、多角的な働きかたの提案・実践を展開している。

REPORT @KCUA

「マーティン・クリード in 京都」

2016年秋、京都市立芸術大学と KYOTO EXPERIMENT との共同事業としてマーティン・クリードを招聘。@KCUA 企画・制作にて展覧会と公演を実施しました。本学美術学部講師で美術家の金氏徹平氏率いる学生+若手アーティストチームとの事前勉強会から公演前のリハーサルの様子まで、プロジェクトの全容の記録集を公開予定です！



マーティン・クリード Martin Creed

1968年イギリス生まれ。ロンドン在住。1990年代から日用品・文房具など身近なものを素材にした作品を多く制作する。2001年《Work No. 227（ライトが点いたり消えたり）》にてターナー賞受賞。近年の主な個展に、パークアベニュー・アーモリー（ニューヨーク、アメリカ、2016）、ヘイワード・ギャラリー（ロンドン、イギリス、2014）、テート・ブリテン（ロンドン、イギリス、2013）、アンディー・ウォーホル美術館（ピッツバーグ、アメリカ、2013）、シカゴ現代美術館（シカゴ、アメリカ、2012）など多数。音楽活動も行っており、2016年夏にリリースした『Thoughts Lined Up』のほか、数枚のアルバムが発表されている。

展覧会

《Work No. 2656 Understanding》と《Work No. 1701 ウォーキング・フィルム (「You Return」に合わせて)》の2点の映像作品を1室1点で、という極めてシンプルな形で展示。@KCUAの白い壁はこれに合わせて真っ黒に塗り替え、床は黒カーペットを敷いてブラックボックスに。初日にはアーティスト・トーク (実質はライブ・パフォーマンス) が行われました。

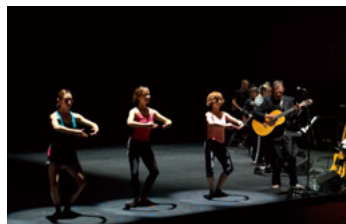
Photos by Takeru Koroda



《Work No. 1701 ウォーキング・フィルム (「You Return」に合わせて)》



《Work No. 2656 Understanding》



公演

ロンドンからやってきたバンドメンバーに日本人出演者 (ダンサー3人、通訳) を加えて元崇仁小学校および会場にてクリエーション。公演当日は、二日間とも事前情報の公演時間を大幅に超えて、熱のこもったパフォーマンスが繰り広げられました。

Photos by Yuki Moriya

ア ク ア SCHEDULE @KCUA [2017.4-2018.3]

4月 APR.

5月 MAY

6月 JUN.

7月 JUL.

8月 AUG.

9月 SEP.

10月

4/8 (土) - 5/21 (日)

京芸 transmit program 2017

開館当初から継続してきた企画「京芸 Transmit Program」を今年からリニューアルし、京都市立芸術大学を卒業、あるいは大学院を修了してから3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUA が一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトとして新たに始動。今年度は西太志、水谷昌人、迎英里子、矢野洋輔の4人を選出。



Eriko Mukai, Approach 6.0, 2017

Photo by Takeru Koroda

6/10 (土) - 7/2 (日)

芸術資料館収蔵品展 2017

本学芸術資料館収蔵品から、昭和44年(1969年)に美術調査隊によって収集されたニューギニア民族資料を中心に展示。本学が持つ芸術資源の新たな活用のあり方を探るための実験的展示となる。

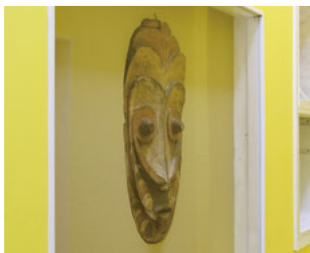


Photo by Takeru Koroda

7/8 (土) - 7/23 (日)

「シンフォニー LDK」(仮題)

出展作家：小松千倫 + 石塚 俊、荒木優光ほか

7/8 (土) - 7/23 (日)

笹岡由梨子「Hello Holy!」(仮題)

9/23 (土・祝) - 11/5 (日)

京都市立芸術大学移転整備プロジェクト

still moving 2017: 距離へのパ

(崇仁地域を中心に展開・会期中の土日祝のみ)

8/5 (土) - 8/13 (日)

サイレントアクア 2017

8/5 (土) - 8/13 (日)

京都同時代学生陶芸展

8/5 (土) - 8/20 (日)

唐仁原 希・吉田美希子

「ふたつのせかい」(仮題)

9/2 (土) - 10/15 (日)

身体0ベース運用法

ものづくりの観点から出発し、身体0ベース運用法」と名付け、染色作家、安藤隆一郎の理念「0 GYM」が出現。今春より、リソナルトレーニングを行う(期間中は、鑑賞者もここで「身体0トレーニングを行うことが可能

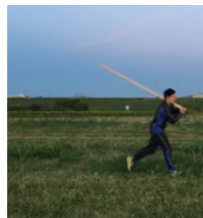


Photo courtesy of Ryuichiro Ando

0月 OCT.

事業

のパス— far away/so close

祝のみ公開予定)

日)

用法「O GYM」

出発した身体運用法を「身
名付け、そのあり方を探る
の理念のもと、@ KCUA に
より、若手作家を対象にパー
行う (pp. 4-15 参照)。会
で「身体0ベース運用法」の
が可能!



ro Ando

11月 NOV.

11/30 (木) - 12/10 (日)

京都市立芸術大学第 28 回留学生展

10/28 (土) - 11/26 (日)

アリン・ルンジャー (タイトル未定)

「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015」参加作家
として 2015 年春に京都市美術館で作品を展示したアリ
ン・ルンジャー (Arin Rungjang) の日本初の個展。
1975 年生まれのルンジャーは、第 55 回ヴェネツィ
ア・ビエンナーレ国際美術展 (2013) やドクメンタ 14
(2017) に招聘されるなど、タイを代表する現代美術家
の一人である。本展では新プロジェクトを展開予定。



Detail from Arin Rungjang, Golden Teardrop, 2013

12月 DEC.

12/16 (土) - 2017/1/8 (月・祝)

西田真人 (本学美術学部日本画専攻教授) 退任記念展

1月 JAN.

1/13 (土) - 2/12 (月・祝)

「思考する技術」(仮題)

出展作家: 池田精堂 × ERIKA RELAX、
石井 亨、牛込陽介、トーマス・トウエイツ、
宮崎啓太、李 豪哲

2月 FEB.

2/17 (土) - 3/4 (日)

京都市立芸術大学美術学部同窓会展

(タイトル未定)

/ Still Moving: The '80s

3月 MAR.

最新情報は @KCUA ウェブサイトにて
ご確認ください

あらゆる役割にプロがいる わけじゃない

榎原充大

「建築家 / リサーチャー」という肩書きで活動をしていると、「どんなことをするんですか？」ということをししば聞かれる。たいていの場合、「発注者」は研究者、機関や施設、企業、行政職員などが多いこと、「建築や都市に関わりそうだけどだれに頼んだらいいのかわからないこと」で困っている方から相談を受けていること、しかるべきアウトプットを探り解決を目指していくこと、などを答えている。

「文章を書いて欲しい」とか「刊行物の編集をしてほしい」といったシンプルな相談もあれば、「展覧会を行うので会場構成やドキュメンテーション制作をお願いできる人に企

画段階から入ってほしい」とか「建築に関する研究成果を活用するためにどうしたらいいか一緒に考えてほしい」とか「公共空間の使われ方と今後の使い方に関する調査分析と一緒にやりたい」といった、一筋縄でいかない相談もある。さらには「まちづくりのプロモーションはこれまで広告代理店の仕事とされてきたけど違う戦略で行いたい。どうしたらいいか」という難題も寄せられる。

「建築や都市に関わりそうだけどだれに頼んだらいいのかわからないこと」というのは具体的には上のようなことを指している。世の中には困っている人が多いこと、その困っている内容は結構クリアにしばらく、を感じる。と同時に、「自分よりも適任者がいるんじゃないか」と思うことも結構ある。かといってその具体的な名前は出てこない。

自分よりも状況に詳しいひとが「同じことを実はかつて誰それが……」とか、「それならば誰そのの方が……」と、耳元でささやいている気がする（空想）。間違いなく、古今東西を見渡せば前例も適任もいるだろうが、「いま」「ここ」で受けている相談に本当に適しているかはわからないし、「その相談」を受けているのは自分自身なので、自ら

が「どのような役割を担えばいいのから考える」役割を引き受けている。あらゆる役割にプロがいるわけじゃない、と思うことの方が前向きだ、と。

こうして受けた相談に対応するため、基本的にはチームをつくって取り組んでいる。たとえ一人で文章を書くときも依頼者や編集者とチームを組む思いで進めている。手を組む相手は、デザイナー、研究者、プログラマ、アーティスト、ライター、編集者などなど。その中にはもちろん「建築家」というひともある。

自分も建築士の資格を持っているが、「自身の作品をつくる」くらいに設計に誇りを持つひとが必要になるシーンはある。最近では「作品」ではなく「プロジェクト」と呼び替えられたり、ワークショップで得た市民の声をいかに設計というアウトプットへと反映させられるかが重視されることも多い。「建築家という職能も変わらなければならない」「建築家はもっと社会との接点を」みたいなことを言われたりもする。自分もかつてはそうのように考えていた。

でも今はさほど思わない。ある課題に対して「建築家の作品」が必要になる場合もあるし、「社会」をまったく顧みない着想から生まれた提案が望まれる場合もある。問い

直されるべきは、あるアウトプットを作品と呼ぶかプロジェクトと呼ぶかよりも、むしろ、ある課題に対するアウトプットやそれを担う役割が問い直されないままであること、ではないかと思う。「誰に頼んだらいいかわからないこと」の解決のためには、アウトプットのかたちから根本的に考えられるべきであって、設計はあり得る候補のあくまでもひとつでしかない、と考えるようにしている。

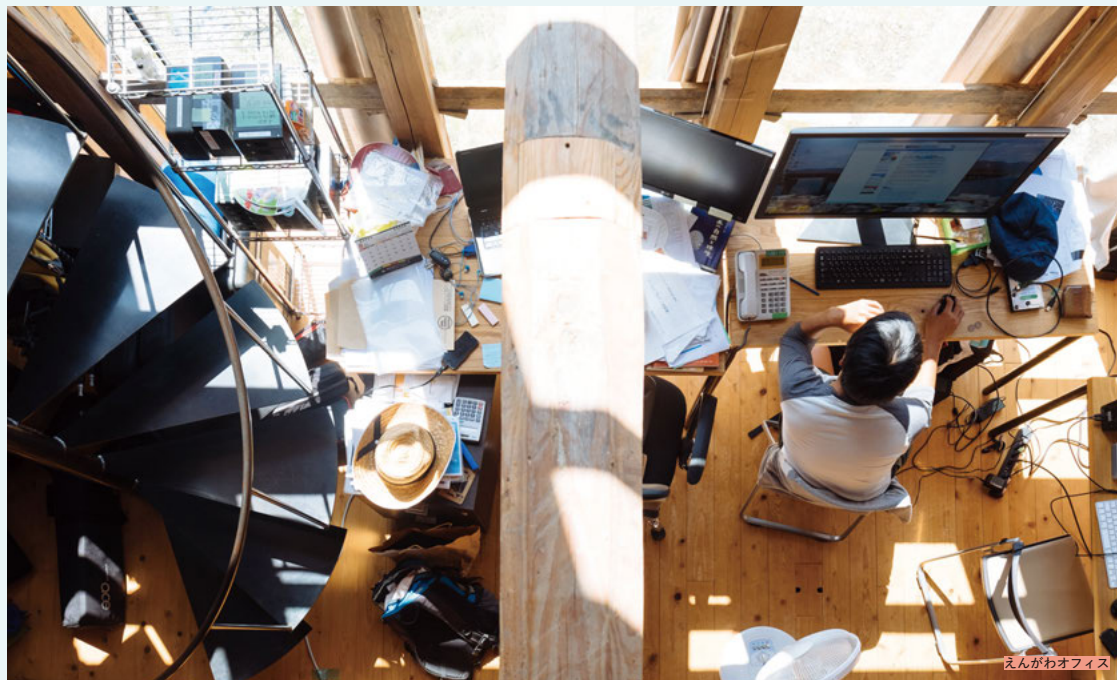
あらゆる役割にはプロがいるわけじゃなくて、その中には取り組む主体を待っているものも少なくない。そんな、まだ名前が定まっていない役割とともに、新たなプロジェクトが展開したりしなかったりする。そんな風景をたくさん見たいし、貢献できるときは貢献したい。

榊原充大 Mitsuhiro Sakakibara

建築家 / リサーチャー

1984年愛知県生まれ。2007年神戸大学文学部人文学科芸術学専修卒業。建築に関する調査、取材、執筆、提案、ディレクション、アーカイブシステム構築等、編集を軸に事業を行う。2008年に共同で開始した建築リサーチプロジェクトRADは、2015年に「still moving」にて「SUUJIN MAINTENANCE CLUB」を実施。寄稿書籍『レム・コールハースは何を変えたのか』（2014）、制作書籍『LOG/OUT magazine ver. 1.1』（2016）。京都精華大学非常勤講師、京都建築大学非常勤講師。

STUDIO VISIT @KCUA



vol. 3 坂東幸輔 | 徳島県神山町

Interview by Mizuho Fujita

@KCUA が様々なアーティストのスタジオを訪問し、スタジオの様子や今気になっていることをお聞きするコーナー「STUDIO VISIT @KCUA」。第3回目は、徳島県神山町など全国で「空き家再生まちづくり」の活動を行う建築家の坂東幸輔さん。今回は「スタジオ」を拡大解釈し、徳島県神山町へ。坂東さんのナビゲーションのもと、取材してきました！

ブルーベアオフィス神山 (2010)



坂東：これは神山町での最初のプロジェクトです。アメリカから帰国して、東京藝術大学の助手をしていた頃、2、30人くらいの学生と一緒に手がけることになりました。大工さんじゃないとできない仕事以外、例えば柱を入れたりとか、構造用のボード貼ったりとかは、指示をもらいながら実作業もしました。

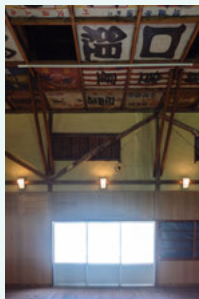
関わった学生のうち、5人くらいは1ヶ月ずつと滞在していました。

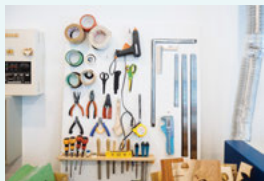
特に2階の床が波打っていて、今まで見た空き家の中でも一番ひどかったかもしれません。これを初めて見ているので、他のところへ行っても、なんとかなるかなあ、と思ってしまうんですよ。

寄井座 (2011・ワークショップ)

坂東：次のプロジェクトは、ここ、寄井座でのワークショップです。この地域の火災の災害復興の一環として建てられたもので、出資企業の看板が天井広告になっています。神山町で行われているアーティスト・イン・レジデンスの発表の場にもなったりしたのですが、老朽化が激しく、これからさらに使っていくためには再生の作業が必要です。

そこで、この寄井座のある寄井商店街全体の再生を考えるワークショップを行い、実測調査や活用の提案などをしました。まだ実際に改修はされていませんが、いつかできたらいいなとは思っています。神山町のまちづくりは、「空き家再生」の次の段階に進んでいます。住民たちの力で、新しい町営住宅が建てられたりしている。街はどんどん変わっていますし、もし、ここを再生してほしい、という声が上がったら、天井だけはしっかり残すけれど、外観は完全に新しくしたい。木造にこだわることもないかもしれないですね。





神山バレエ・サテライトオフィス・ コンプレックス (2013)

坂東：2010年に閉鎖された縫製工場を改修したものです。築30年くらいの建物で、予算があまりなかったので、620m²のうち、100m²を改修しました。神山町にサテライトオフィスを構えたい人がたくさんいるのに、空き家が足りないという事情があって、ここを整備することになりました。

(注：坂東さんの取り計らいで、神山バレエ・サテライトオフィス・コンプレックスの一角をお借りして、取材1日目の夜に私たちも「リモートワーク体験」をしました!)



えんがわオフィス (2013)

坂東:母屋については、施主のプラットフォームさんの「オープン・アンド・シームレス」というコンセプトのもと、縁側を作ってほしいという依頼がありました。蔵については、隣接していた建物の火事のために壁面が失われていたので、それを直すのではなくてガラス張りにして、オープンな感じにしました。



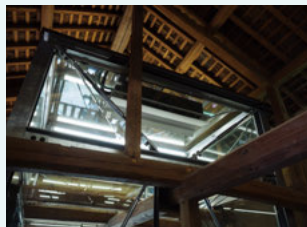
WEEK 神山 (2015)

坂東: 神山町に訪れる人がどんどん増えてきて、宿泊施設のニーズが高まったため、神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックスの向かいの古民家が改修されました(食堂棟)。こちらのプロジェクトでは改修の方ではなく、新築のゲストハウス棟を手がけました。WEEK 神山は、1週間の滞在で、神山での仕事体験をすることを想定して作られています。ここに宿泊して、向かいのオフィスで仕事するということですね。あと、WEEK 神山では「みんなでごはん」というコンセプトがあって、そこで働いている人も含めて、晩御飯の食卓を一緒に囲むんです(イベント時のみ)。



現在の神山町

坂東さんが手がけられたプロジェクトの他にも、IT企業のサテライトオフィスをはじめとして、神山町でいろいろな取り組みを案内していただきました。



Sansan 株式会社 徳島サテライトオフィス



NPO 法人 里山みらい

坂東幸輔 Kosuke Bando

京都市立芸術大学講師／坂東幸輔建築設計事務所主宰。1979年徳島県生まれ。2002年東京藝術大学美術学部建築学科卒業。2008年ハーバード大学大学院デザインスクール修了。スキーマ建築計画、東京藝術大学美術学部建築科教育研究助手を経て、2010年坂東幸輔建築設計事務所設立。京都工芸繊維大学非常勤講師。徳島県神山町、牟岐町出羽島など日本全国で「空き家再生まちづくり」の活動を行っている。主宰する建築家ユニットBUSが第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展（2016）日本館展示に出展。

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Art

@KCUA



京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

〒604-0052 京都市中京区神油小路町 238-1

地下鉄「二条城前」駅 (2番出口) 西東へ徒歩約3分

「堀川御池」バス停下車すぐ

TEL: 075-253-1699

<http://gallery.kcua.ac.jp>

編集: 永田絵里、藤田瑞穂 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)、西谷枝里子 (リレーリレー)

発行: 2017年4月30日

© 2017 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

